０２ 青木稔弥②．ｐｗｄ　１ 版表

時をたがへず守ることは極めて難きものなり

――神戸松蔭女子学院大学所蔵山田美妙関係資料――

青木稔弥

昨年は明治四十三年に没した山田美妙のメモリアルイヤーで、日本近代文学館で十月二日から十一月二十七日にかけて「草創期のメディアに生きて―山田美妙 没後100年」展、盛岡市先人記念館では十二月三日から今年の二月六日にかけて「山田美妙―明治文壇に咲いた花―」展があった。前者には筆者も編集委員として関与し、ささやかながら、勤務先の神戸松蔭女子学院大学図書館から二点の資料貸出も行った。山田美妙手稿「末が有れば本が有る」と『漢語故諺熟語大辞林』である。

臨川書店から発行された図録[1]に、この二点の写真版の掲載はない。実は、臨川書店から『山田美妙集』全十二巻の企画が進行中で、来年四月に第一回配本が予定されている。全集に近い規模のもので、韻文、戯曲と評論の類は全部収録することになっている。初出以来百数十年ぶり見参の文献が目白押しであるものの、原則として、草稿類は収録しない方針である。[2] 国立国会図書館の初版本が同館の近代デジタルライブラリーや『明治期漢語辞書大系』第52～54

０２ 青木稔弥②．ｐｗｄ　１ 版裏

巻（大空社　平8・10・26）等で閲覧可能な『漢語故諺熟語大辞林』[3]はともかくとして、「山田美妙手稿」の方は取り残される公算が大である。紹介しておくことにした所以である。

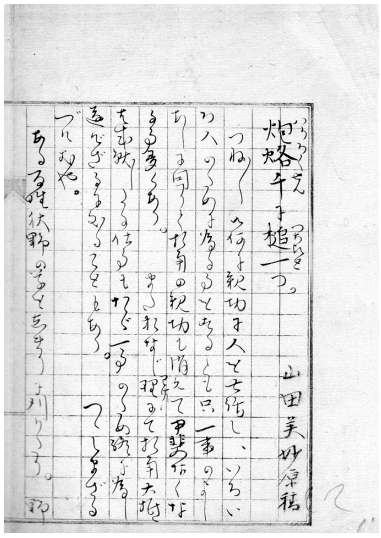
山田美妙手稿「末が有れば本が有る」は、神戸松蔭女子学院大学図書館の目録作成者により「[山田美妙原稿]」と命名された「原稿8枚折り本仕立て、帙入り」の一編。請求記号は「914.6/927」、配架場所は特別書庫で「禁帯出」だが、貴重書指定はしていない。「24.4×32.3cm」の原稿用紙八枚より成り、折本の大きさは「27.4×18.4cm」、秩の大きさは「28.6×19.4cm」である。折本にされた事情や秩が作られた時期等は不明。内容は「焙烙千に槌一つ」（二枚）、「念には念を入れよ」（一枚）、「一も取らず二も取らず」（二枚）、「末が有れば本が有る」（二枚）、「時を守れ」（一枚）で、「時を守れ」の冒頭から七行目半ばまでが朱書されている以外は墨筆である。「時を守れ」の原稿用紙のみ中央に「蘭微舘」の印字がある。

では、順に紹介していくことにしよう。

まず、「焙烙千に槌一つ」である。

焙烙千に槌一つ　　山田美妙原稿

つね／＼如何に親切に人を世話し、いろいろ人のために為る事をするとも只一事のよしあしに自りて折角の親切も消えて甲斐なくな

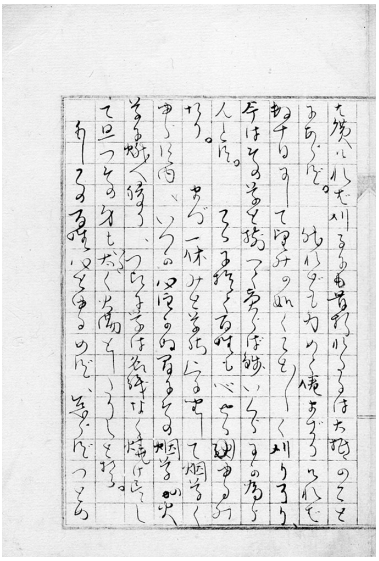


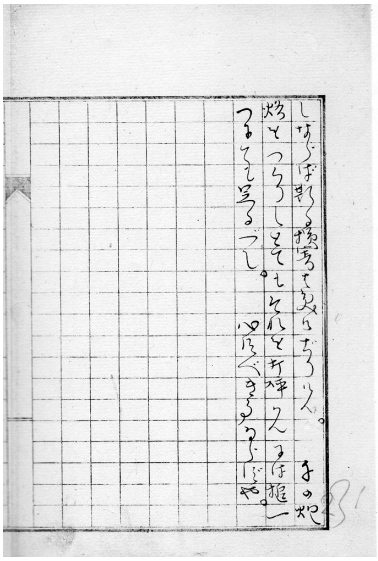
時をたがへず守ることは極めて難きものなり

る事多くあり。　またおなじ理（わけ）にて折角大抵は成就したる仕事もたゞ一事のため終に為し遂げざるに至ることもあり。　つゝしまざるべけむや。

　ある百姓伏野の草をしきりに刈りたり。野は広ければ刈るにも骨折れたるは大抵のことにあらず。　然れども力めて倦まざりければ数十日にして望みの如くこと〳〵く刈り了り、今はその草を揃へて売らば銭いくらにか為らんとす。　こゝに於て百姓も心やゝゆるみたり。　まづ一休みと草の上に坐して烟草くゆらす内、いつか心付かぬ間にその烟草の火草に燃へ移り、つひに草は名残なく焼け尽して且つその身も太（いた）く火傷をしたりしとそ。

　もしこの百姓心をゆるめず、急らずつとめしならば斯る損害は受けざりけん。　千の焙





０２ 青木稔弥②．ｐｗｄ　２版裏

烙をつくりしとてもそれを打砕かんには槌一つにても足るべし。心すべきならずや。

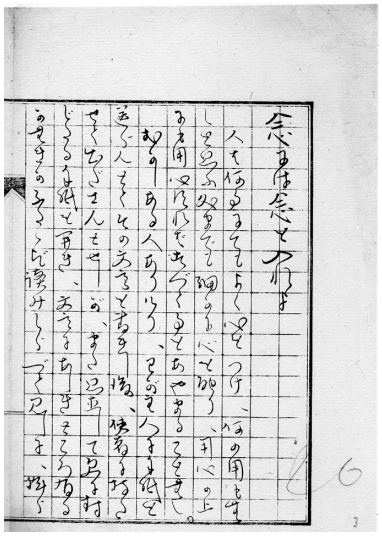
原稿用紙二枚にわたり記されており、一枚目の欄外右下に鉛筆で「22」、二枚目の欄外右下に鉛筆で「23」とある。「百姓も心やゝゆるみたり」は「心やゝ弛」と書き出して訂正している。

引き続き「念には念を入れよ」を紹介する。欄外右下に鉛筆で「26」とある。

念には念を入れよ

人は何事にてもよく心をつけ、何の用も無しと思ふ処までも細かに心を配り、用心の上にも用心すればすべて事をあやまること無し。

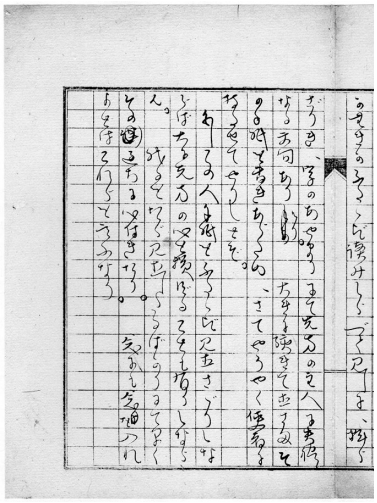
むかしある人ありけり、わが主人に手紙を送らんとてその文言を書きし後、使者に持たせて出ださんとせしが、また思直して更に封じたる手紙を開き、文言にあしきところ有るか無きかふたゝび読みしらべて見しに、料ら



時をたがへず守ることは極めて難きものなり

ざりき、字のあやまりにて先方の主人に失礼なる文句ありけり。　大きに駭きて直さまその手紙を書きあらため、さてやうやく使者に持たせてやりしとぞ。

もしこの人手紙をふたゝび見直さゞりしならば大に先方の心を損ずることも有りしならん。　然るをたゞ思直したるばかりにて早くその過ちに心付きたり。　念には念を入れよとはこれらを言ふなり。



「文句ありけり」は初め「文句ありしか」と書き出している。また最後の「念には念を」は「念には念に」と書いてしまっていたようである。

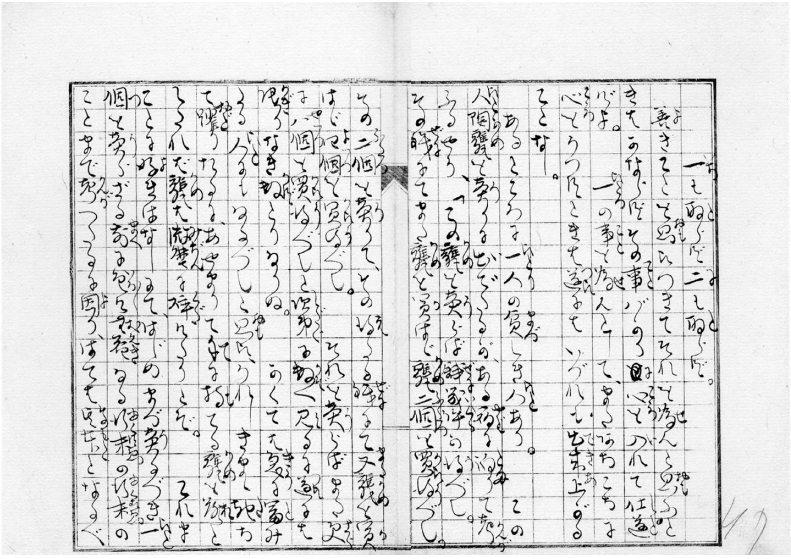
三つめは「一も取らず二も取らず」で、欄外右下に鉛筆で「47」「48」とある原稿用紙二枚に記されている。「47」「48」の数字からも明らかなように、最初の二つとは執筆時期を全く異にするようで、総ルビになっている。

一(いち)も取(と)らず二(に)も取(と)らず

０２ 青木稔弥②．ｐｗｄ　３ 版裏

善きことを思ひつきてそれを為んと思ふときはかならずその事ばかりに心を入れて仕遂げよ。　一の事を為んとしてまたあちこちに心をうつすときは遂にはいづれも出来上がることなし。

あるところに一人の貧しき人あり。　この人陶甕を売りに出でたるが、ある宿に泊りて考ふるやう、「この甕を売らば銭幾許か得べし。その銭にてまた甕を買はゞ甕二個を買得べし。その二個を売りて、その得たる銭にて又甕を買はゞ四個を買得べし。　それを売らばまた更に八個を買得べしと次第に数へ見るに遂には限りなき数とりなりぬ。　かくては急に富みたる人にもなるべしと思ひ、うれしきまゝ起ちて躍りたるに、あやまりて手に持てる甕を落としたれば甕は微塵に砕けたりとぞ。　これま



時をたがへず守ることは極めて難きものなり

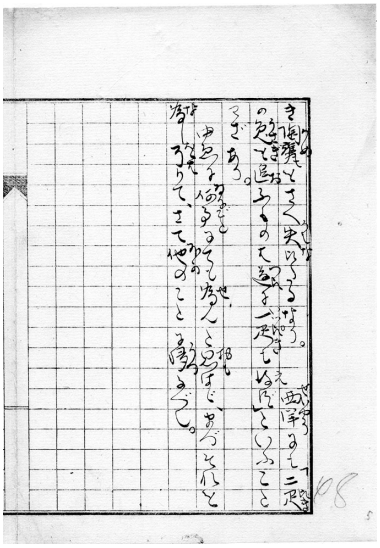
ことに好きはなしにて、はじめまづ売るべき一個を売らざる前に色々無益なる行末の行末のことまで考へたるに因り、はては其本となるべき陶甕をさへ失ひたるなり。　西洋にも「二疋の兎を追ふものは遂に一疋も得ず」といふことわざあり。

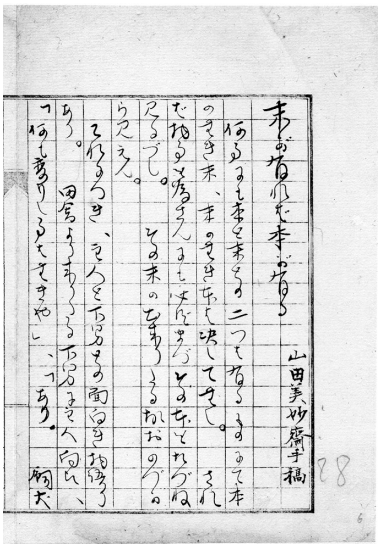
ゆゑに何事にても為んと思はゞ、まづそれを為し了りて、さて他のことに移るべし。

四つめの原稿は「末が有れば本が有る」である。欄外右下に鉛筆で「28」「29」とある。

末が有れば本が有る　　山田美妙斎手稿

何事にも本と末との二つは有るものにて本の無き末、末の無き本は決して無し。　されば物事を為さんにも必ずまづその本をたづね



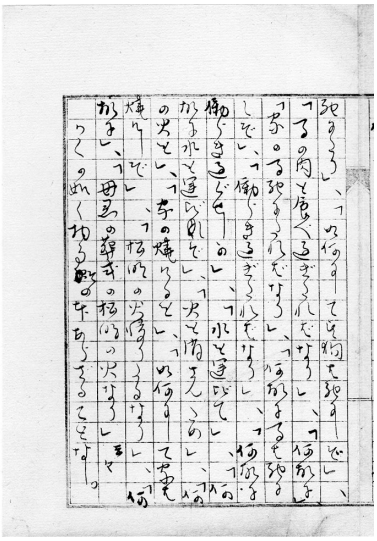


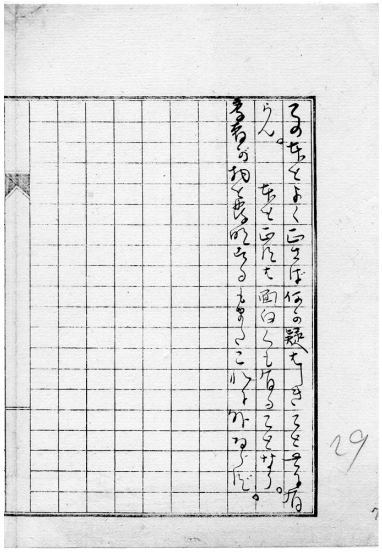
０２ 青木稔弥②．ｐｗｄ　４ 版裏

見るべし。　その末の出来りたる故おのづから見えん。

　これにつき、主人と下男との面白き物語りあり。　田舎より来りたる下男に主人向ひ、「何も変りし事は無きや」、「あり。　飼犬死にたり」、「如何にして其狗は死にしぞ」、「馬の肉を食べ過ぎたればなり」、「何故に」、「家の馬死にたればなり」、「何故に馬は死にしぞ」、「働らき過ぎたればなり」、「何故に働らき過ぐせしか」、「水を運びて」、「何故に水を運びしぞ」、「火を消さんため」、「何の火を」、「家の焼けるを」、「如何にして家は焼けしぞ」、「松明の火移りたるなり」、「何故に」、「母君の葬式の松明の火なり」云々

　かくの如く物事その本あらざることなし。この本をよく正さば何か疑はしきこと世に有





時をたがへず守ることは極めて難きものなり

ら ん。　本を正すは面白くも有ることなり。
学者の物を発明するもまたこれに外ならず。

「山田美妙斎手稿」の部分は美妙の筆跡ではない。わざわざ、このように記しているのは、雑誌等に掲載する予定があったということであろうか。ただし、割付指定が皆無なので、印刷に回されたものでない可能性は高い。

最後は「時を守れ」である。「西洋にむかし」までが美妙による朱筆で、以下は別筆である。別筆の部分の最初に朱で△の印がある。美妙自身による転写する箇所の指示であろう。欄外右下には鉛筆で「30」とある。

時を守れ
　時をたがへず守ることは極めて難きものなれどもよく之を行へば人にも貴ばれ、物のあやまちも少なく、また料らぬ答をも得るものなり。
　西洋にむかしヂョーセフと云へる日曜学校の生徒あり、数年の間毎朝六時に某商店の前を通過せり。ヂョーセフが此所を通行する時は

０２ 青木稔弥②．ｐｗｄ　５ 版裏

丁度此商店の老たる主人が店の戸を開く時なりき。されば何時しか互に「お早やう」と挨拶を為すに至れり。然れども此挨拶の外は曾て何事も話せしことなし。然るにこの老たる主人は不意に死せしが其商店と財産とを悉くヂョーセフに贈らんと遺言せり。この報知のヂョーセフの所へ達せし時其喜び如何ばかりなりけん。

唯これヂョーセフが長き年月の間時間を正しく守りし徳によりて不意に此財産を得、富貴なる生活をも為し得るに至りしなり。

以上で、神戸松蔭女子学院大学図書館蔵「「山田美妙原稿」」の本文の紹介は終わりである。

鉛筆での書き入れは、「焙烙千に槌一つ」が「22」「23」、「念には念を入れよ」が「26」、「一も取らず二も取らず」が「47」「48」、「末が有れば本が有る」が「28」「29」、「時を守れ」が「30」である。「47」「48」という大きな数字を持つ「一も取らず二も取らず」は、総ルビで、ルビがほとんどない他のものとは一線を画する。残りの四編の成立時

期は、あるいは近接しているのかもしれないが、24、25、27が脱落し、「末が有れば本が有る」の冒頭には改めて「山田美妙斎手稿」と記している。「末が有れば本が有る」と「時を守れ」は「28」「29」「30」と連続しているが、後者の原稿用紙は他とは全く違い、別筆が入るという問題もある。鉛筆での書き入れと折り本仕立ての関連性は薄く、「時を守れ」を筆写させた美妙の意志とも別次元のものなのであろう。

混沌とした成立事情と言わざるをえない。出典の解明にも取り組む必要があるであろう。諸賢の有効活用を願って結びとする。

時をたがへず守ることは極めて難きものなり

（1）日本近代文学館の特別展開幕前日の十月一日刊。ぎりぎり間に合った図録編集の過程で色々と面白い発見があった。例えば、筆者が担当した第Ⅰ部の最初に掲載した「父・吉雄と写したガラス板写真　辛未（明治4年）正月三日於新明前野村楼写之」（日本近代文学館蔵）は、塩田良平『山田美妙研究』の口絵一頁め右下と山田篤朗『山田美妙　人と文学』18頁に写真版の掲載があるが、両者は左右反対（裏焼き）になっている。襟の向きなどを検討した結果は『山田美妙　人と文学』の方が自然で、山田家に伝わるアルバムにも同じ向きの紙焼き写真があることが判明した。

（2）晩年の歴史小説の類は全面的にカットせざるをえないが、菊池真一監修『山田美妙歴史小説復刻選』（本の友社）により、ある程度の補完は可能である。

（3）日本近代文学館の特別展では、神戸松蔭女子学院大学図書館蔵本を早稲田大学蔵の初版本と並べた。神戸松蔭本は「明治三十八年一月十日増補第八版発行」で、「引用書」までと本文は初版本と同じであるが、「引用書」の後に「頭字索引」を増補して利便性を高めている。奥付の「印刷所」は「大阪市西区新町北通壹丁目六十五番邸」で、初版本での「六十五番屋敷」を「六十五番邸」とする小異がある。また、末尾には初版本に無い『新編漢語辞林』の広告がある。

最新式大辭林——辭書中之辭書
山田美妙先生著
新編漢語辭林
一名 熟語六萬六千辭典
定價金參圓特別正價壹圓六拾錢郵稅拾八錢
洋裝クロース
緞帕來上紙印
刷紙數一千六
百餘頁
本書の特色
文字を知り讀み方を知らざる者は畫引に、讀み方を知りて文字を知らざる者はイロハ引にて、直に欲する所の文字を捜索し得べし是特色也
漢語體を成せる二音以上の熟語、新古雅俗方言俚言を問はず百科に亘り萬象に洽ねく、之を一冊一千六百頁に網羅したる採拾の總語數無慮六萬六千以上を含蓄せるもの是れ最新刊の本書とす、辭書界の著者の手腕は世既に知る今贅せず此類の多方面の語を含み大多數の量を有するもの實に此辭林を以て今日匹敵なきものとす其解釋や簡にして而かも明、其配列や精にして而かも確、同音類形に分類して、一摸直ちに其欲する語を索むるを得べきのみならず、更に索引をさへ加へし等用意周密に使用者の便を圖りて、また毫釐の遺憾なし